掛川市岡津横穴墳B群

発　掘　調　査　概　報

――東名高速道路建設に伴う発掘調査――

1967

掛川市教育委員会

掛川市岡津横穴墳B群
発　掘　調　査　概　報

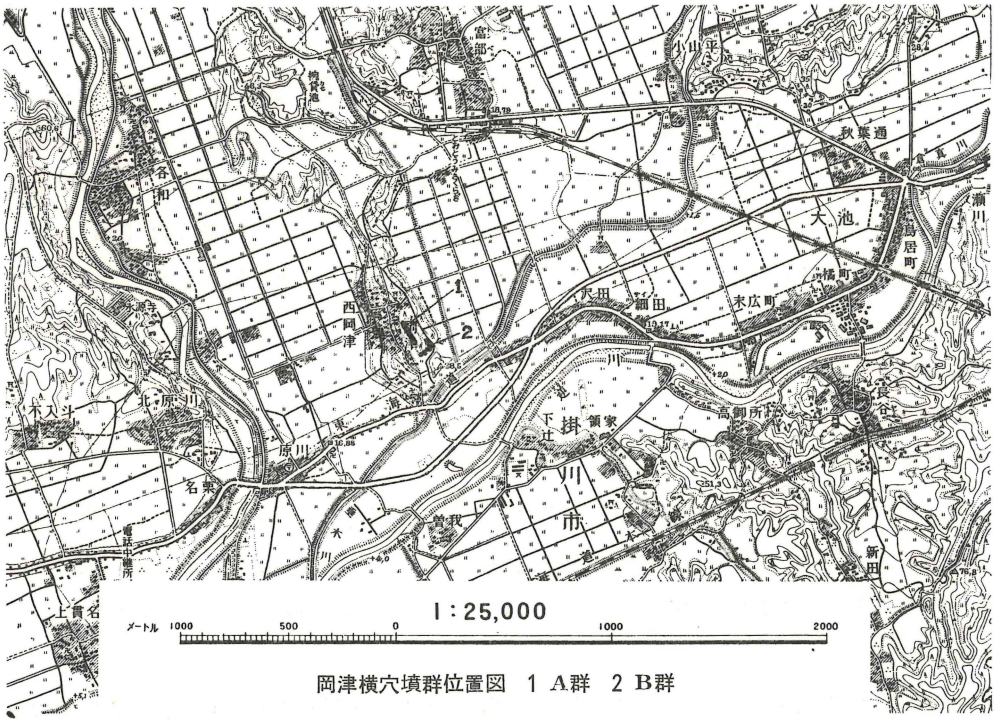
―― 東名高速道路建設に伴う発掘調査 ――

掛川市岡津横穴墳B群

発　掘　調　査　概　報

—東名高速道路建設に伴う発掘調査—

1. 所　在　地　　掛川市岡津408番地
2. 調査期間　　昭和42年7月1日～昭和42年7月24日
3. 調査主体　　日本道路公団
4. 調　査　者　　静岡県教育委員会・掛川市教育委員会
5. 調査担当者　　平野　和男・山村　宏・大谷純仁（執筆者同左）
6. 参　加　者　　大谷　純仁・山下　晃・嶋　竹秋・大崎　辰夫・宮本　豊彦・増井義昭・池田　純・黒田　勝久・後藤　武蔵・松浦　哲二・柴田　稔我妻　柾生・福島　啓記・松沢　修・山田香代子・太田　隆雄・秋野京子・平尾　光枝・磯沼　彬・野尻　侃・河内　俊章・渋谷　忠章浜松女子商業高校・誠心女子高校・掛川西高校・掛川東高校各郷土史研究部



岡津横穴墳群位置図　1 A群　2 B群

調　査　の　概　要

I. 経　　過

6月29日掛川市教育委員会の連絡によって岡津A支群の立置した丘陵先端部において新たに横穴墳が発見された。筆者は直ちに県教育委員会に連絡するとともに調査体勢を整え7月1日より発掘調査を行った。

発掘調査は、発見時においてブルドーザーによって天井部を破壊した（第4号・第6号・第7号）横穴墳より作業を始めた。その結果、第4号と第6号との間に少規模な第5号が発見され、また第4号西側に3基（西より第1号・第2号・第3号）が発見されるに至った。

発掘作業の進行につれ、第7号の東側 30 cm ほど高位で3基（第8号・第9号・第10号）が発見され、またその東側 2 m 低位に3基（第11号・第12号・第13号）が発見された。調査の終盤近くになって、丘陵東側に3基（第14号・第15号・第16号）が発見されるに至って、岡津B支群と命名された横穴墳は4グループ16基よりなる支群であった。

II. 概　　要

A 地　　形

東名高速道路が国道1号線を北に越した地点、岡津原台地の先端部に岡津B支群が位置している。

岡津原丘陵を形成している地形は、基盤に小笠山礫層（更新統）と掛川砂層（鮮新統）によって形成されている。掛川市・袋井市周辺に存在する横穴墳の多くは、この掛川砂層の露頭する部分に分布している。当横穴墳群もその条件にもれず、岡津原丘陵の南斜面に露頭する砂層に掘削されている。丘陵を形成している前述の層はB支群の位置する附近においては約 5 m の厚さを有し、洪積世礫層が少くとも 12 m ほどある。鮮新世の砂層は粘土層と瓦層をなし、南より観察すると西へ流層している。特にB支群の位置する附近においては瓦層の剝離がめだち、横穴の保存状態も頗る悪いものであった。

B 遺跡概要

第1号横穴墳

本墳は群中最西端に位置している。前庭部は暖やかな傾斜をもって羨門に接している。

西側前庭壁は群の西境を兼ね、彎曲を描きながら横穴西壁へと続いている。羨道口部における発掘当時の閉塞断面は 30 cm×20 cm の河原石が床面に接して1～2段現存するのみであって、築成当時の様相を異にしている。

羨道部は長さ 3.81 m・巾 85 cm を計り、支群中最も長い羨道を有しており、第2号横穴の平

面形より推察すると、羨道の長さが他に比して極端に長く、両壁の内面壁は中央部において内側にやゝふくらみはあるものゝほゞ直線であるのに対し、東壁は玄門に近くなるにつれ西側へ大きく曲っている。このことは築成当初第2号横穴の玄室西壁が第1号横穴東壁を直線的に掘削したものとすると完全に破壊することになる。このため第1号横穴東壁は途中において西側へ大きく曲げねばならない結果となっている。しかるに羨門附近の主軸方位はN—35°—Wを示すものゝ全体的にみた主軸はN—48°—Wとなる。羨道部における掘削工程は巾7～8cm 内外の工具を用い天井中心部より壁底部に向って優美な整形痕を残している。特に玄門附近において顕著である。

玄室は平面型が不整隅丸方形を呈し、羨道との区別も明確で、西壁袖部は110°の角度をもって奥壁にと続き、東壁袖部は隅丸状を呈して続いている。奥壁はアーチ状をなし天井にと続くが、天井部は落盤により形状はさだかでなく、羨道部天井との関係も明確でない。

玄室内床面は約5°の傾斜をもって奥壁から 3m 位まで下り、その後羨道口まではほゞ平坦であり、傾斜のなくなる附近より閉塞積がなされていたと思われるところから、玄室内に排水施設を造る必要性も約5°の傾斜があればないであろう。また玄室全体が5°前後の傾斜を有しながら玄門より 10cm の所に5～8cm の高さを有す棺座を備えているが、一般的にみられる棺座とは概念的に異るものである。

第2号横穴

本墳は第1号横穴の東側に位置し、第1号横穴の平面形を変更させ得るような位置に築成されている。前庭部は西側を第1号横穴前庭に切られ、東側は3号横穴の前庭を切ったような状態を確認できる。前庭部より羨道口にかけての傾斜は 40° を示し、5cm 程の段を有して羨門にと続く。羨門部における閉塞石の状態は良く、築成当初と変化なく5～6段築成で、高さ 70cm・巾 1.5m を計測でき、縦断面は三角型を呈す。

羨道は長さ 1.84m・巾は羨道口 70cm・玄門口1m 前後であって、両壁は玄門部に行くに従って広がりを有すが、玄門口でやゝせばめられている。閉塞石は羨道の大部分を占め羨道としての機能は失われている。

玄室は丸味を有した台型状を呈していて、西袖 80cm・東袖 25cm と主軸に対して著しく不均衡の築成で、隣接する第3号横穴との関連によるものかとも考えられる。横断面はドーム状を呈するものと推察されるが、天井部は落盤のため計測不能である。床面は棺座・排水溝等の施設はなく、一部において砂岩質基盤上に張り床と思われる部分が観られたが、確証する資料の検出もなく、追葬も行なわれていない。

副葬品は玄室のほゞ中心部において須恵器坏身1が伏状態で検出されたのみである。

第3号横穴墳

第2号横穴の東側に隣接する本墳は全長 2.14m・巾 60cm～40cm・高さ 90cm 前後の筒型状を呈す小墳で、羨道と玄室の区別はない。

前庭部は東側第4号横穴前庭を切り、西側第2号横穴前庭に切られていることが観察できる。閉塞石は現存する部分で4段の築石が観られ、比較的角の多い河原石が使用されている。特に本墳における閉塞の状態で他と異る点は墳穴内に閉塞する石積が外側に多く架設されている。このことは規模の点から推察しても遺体の埋葬と関連する結果と考えられる。

横穴内は前述の如く筒型で奥壁へ行くに従って狭められ、その巾は 29 cm を計測できる。床面は棺座・排水等の施設はまったくなく、奥壁より入口にかけ6°ほどの傾斜を有していくが、ほゞ平担と言える。横断面は両壁とも 14° の傾斜を有して直線的に接していて、その型状は三角型を呈するものである。

室内は攪乱された痕跡は認められず、副葬品は原状のまゝと考えられる。

検出されたものは、閉塞内側に接して須恵器坏身2・坏蓋1・小型広口坩1が各々身部を上に向けた状態で、しかも配置も原状保存の良好な1例である。また室内中央部において長さ 16 cm の刀子が切先を入口に、刃を東壁に向け検出された。

第4号横穴

前庭部は西側を第3号横穴前庭によって切断されているが、羨門より 1.2 m の地点で前庭壁が現存している。東側においては第5号横穴前庭部附近まで達しているが不整形である。

前庭は 30° 前後の傾斜をもって羨門に達している。門塞は河原石で現存3段程が巾 1.3 m・高さ 50 m 間にみられ、前庭部には崩れた状態の河原石が10数個傾斜に沿って検出されている。

羨道部は閉塞位置において横断面の形状が台形を呈し、玄門に進むにしたがってドーム状に変化する。羨道天井部は落盤によって現存しない。

玄室は角丸長方形のツメ整った形状を呈している。床面は追葬時か或は追葬以外の目的での攪乱が認められ、特に羨道寄りの部分においては追葬時の副葬品が下層より検出されるほどであり現存部との高底差は 15 cm 程度である。床面傾斜は僅であるし、棺座・排水の施設は攪乱を考慮しても存在しなかったと思われる。奥壁は高さ 1.5 m 前後の仏光背状をなし、天井部に接している。

副葬品はいずれも破壊され、玄室内に散在した状態で、しかも前述した攪乱個所に時期を異にするものが相まって検出され、同個体のものが距離を隔てゝ検出される状態である。

出土品は須恵器のみをみると第3期後半期と第5期前半期ものとに分けることができる。その他直刀片・刀子6・耳環1・勾玉1・鉄釘7が原存位置を移変したと思われる状態で検出された。

第5号横穴

本墳はAグループと仮称した第1号横穴から第6号横穴までのうち、最初の時期に築成されたと考えられる第4号横穴と第6号横穴に挾まれて、両横穴間の僅かな空間を利用して築成されたと考えられる。

前庭は第4号横穴の前庭をなんら手を加えずして利用したものと思われ、20° 前後の傾斜をもって羨門に達するが、羨門に接する部分で 23 cm ほどの高低差がある。このことは後述する第

16号横穴と本墳のみにみられる単独の前庭を架設しないものである。

全長 1.82 cm のうち羨道の占める長さは 1.1 m である。閉塞は河原石で高さ 30 cm・巾 20 cm 3 段の架設で施されている。閉塞石は崩れはみられずほとんど原状のまゝであろう。

玄室は主軸に 80 cm・巾 50 cm の小規模な隅丸方形の平面形を呈している。床面は棺座・排水溝の施設はないが、西北隅が他所より 12 cm ほど高く、玄室内に存した河原石 4 個とともに簡単な棺座を施設したものと考えることも出来るが確認を得なかった。奥壁は 15° 前後で内傾し天井部に接している。横断面はアーチ状を呈するものである。

副葬品は閉塞内側の中央部に坏部を上に向けた状態の須恵器高坏 1 、玄室内東壁寄りに切先を奥壁に向けた 10 cm ほどの刀子 1 が検出された。

第 6 号 墳

規模、内部構造、副葬品いずれにおいても当支群中最大最高の内容を有しており、主墳的要素を備えている。

前庭部は西壁が第 5 号横穴前庭において第 4 号横穴前庭壁と接し、東壁は第 7 号横穴築成の際に消滅したと考えられ、またAグループの東壁でもあったように推察できる。前庭基盤は 20° の傾斜をもって羨門に接するが、15 cm の段をもって前庭と境をなしている。

羨道は長さ 2.48 m・巾 1.02 m の規模を有し、閉塞は長さ 1.5 m・巾 80 cm・高さ 75 cm、間に 4 段〜 5 段の架設がなされ、特に基礎石には 60 cm×50 cm・60 cm×30 cm の大型石を配石している。天井部は玄室部と羨道前部の部分が落盤し規模・型状は定かでないが、全体からうける感じは羨道部においては両壁ともに床面より 70 cm ほどのところまでは垂直に立あがり、アーチ状の天井を有するものであろう。また両壁ともに巾 7 cm 位の工具による整形痕が上から下へと、ほとんど垂直に切り整えられている。平面よりみる羨道は羨門附近と玄門附近が巾広く中央部で巾狭くなっていて、ゆるやかな曲線を描いて玄室に続いている。

玄室は一般に角丸方形を呈するものであって、主軸に 2.97 m・横巾 2.45 m の数値はほゞ正方形に近い。しかし全体的にみると奥壁部が巾広く、袖部で僅かに狭ばまれた型状であって、羽子板状を呈していると言える。袖部は両袖ともに 35 cm ほどの袖出しがあり、玄門での曲角はほとんど直角である。奥壁は約5°の内傾がみられ、天井に接する部分が崩壊しているが尖頭アーチ状を呈するものであろう。

天井部の崩壊は甚だしいが、保存の良好な玄門部における型状から尖頭アーチ状を呈したものであろう。

主体部の造りは特に技が凝らされている。まず棺座であるが、奥壁よりに主軸 1.38 m・横軸に 2.40 m の造付けの棺座を設け、玄室と棺座の間には縦巾 22 cm・横巾 2.25 m・高さ 13 cm の造り付けの堤を設けている。堤の内側は巾 8 cm 内外・深さ 7 cm の排水溝が施設され、棺座上での排水は前述の排水溝を通り、堤の中心部を縦に切り造られた排水溝か西壁直下の堤の存在しない部分を通り玄室下方へと流し出す技と推察される。

棺座の上には千枚岩の扁平な割石が平らに敷きつめられ、堤内側の排水溝には同一の割石が横位に立てられている。またこの割石は堤の外側にも16枚ほど敷かれていたが、追葬時か或いはなんらかの目的で位置を変えたものであろう。床面の傾斜度は棺座上が平担であるのに対し、玄室は5°の傾斜を呈して羨門までさがっている。

副葬品はすべて玄室西壁袖から羨道にかけての検出が大部分で、前述の棺座上では金環1・銅製飾金具残欠と若干の骨片のみであった。西壁袖部における出土状態は鉄製品の破損状態、同一個体破片の散在など到底埋葬時そのまゝの状態とは考えられない。この外検出されたものを列記すると、須恵器坏身3・坏蓋1・高坏3・平瓶2・長頸坩1・広口坩1が西袖部から玄室西壁寄りに検出され、土師器2個体分が須恵器附近と羨道部にかけ散在し検出された。武具鉄製品は刀子6本が西壁袖の僅かに玄室寄りのところに他の不明鉄器残欠（轡？）と共に検出された。圭頭大刀にいたっては柄頭は羨道、切羽・把縁は袖部、鍔は不明鉄器附近から検出された。いずれも鉄地金銅張りの装具を施したものであるが、刀身は切先部分 10 cm 位の残欠の他は検出されていないし、把・鞘の残存も検出できない。しかし、副葬品の遺存した附近床面に金銅の細片が検出されたことは、埋葬時は一刀の金銅張外装の圭頭大刀であったと推察できる。その他に銅製鈴2個体分の残欠が検出されている。

いずれにしても須恵器・土師器は一般的には袖部附近に埋納されるものであるが、武具の類は遺体附近の検出が通例であり、本墳のような出土埋葬後になんなかの目的で手を加えられたと推察するものである。

第7号横穴

本墳は第6号横穴の東側に隣接するが、羨門における高低差で第6号横穴より 40 cm 高く、第6号墳の前庭及びAグループの東境壁をも切断し、Bグループ第8号横穴の前庭を切断している状態からみると、本墳はA・Bグループのどちらにも属さない単独するものと考えられる。

前庭は30°の傾斜をもって羨門口に続いているが、前庭東壁の状態をみると本墳の場合、前庭をあえて形造るものではなく掘削するのに必要な巾のみ加工している。このことは床面でも観察できることであるが、第6号横穴の前庭に僅かに手を加えたのにすぎない様相であって、30°の示す傾斜度は第6号横穴を10°上廻る勾配を呈すものである。

羨道と玄室とは区別しがたい平面形をなし、羨道部が最挾巾で、奥壁部が最大巾を有する筒型の横穴である。羨門より 2.36 m 入った東壁に僅かであるが袖がみられ、しいて言えばこの部分が羨道と玄室とを区別する箇所である。閉塞石は巾 65 cm・高さ 65 cm 間に5段架設されている。羨道部の天井は落盤により定かでないが、横断面はドーム状をなすものと考えられ、床面は平担で東壁直下に奥壁直下より巡る巾 5 cm・深さ4～5 cm の排水溝を設けている。

玄室床面は4°前後の傾斜で羨道にさがっているが、中央部にやゝ円形の高い部分が存在する。奥壁よりに巾 1.15 cm・高さ 10 cm 前後の棺座が施設されているが、これまた4°前後の傾斜をもっている。玄室内には比較的扁平な河原石10数個が点在するが、棺座として使用された確証は

ない。横断の様相は天井部の落盤で定かでないが、奥壁部でアーチ状を示し、羨道に近ずくに従ってドーム状に変化している。

副葬品は奥壁寄り中央部において須恵器細頸瓶１・鉄鏃片１が、玄室中央部において須恵器盌１・土師器坏身１・刀子片１・鉄鏃片２が出土している。

第８号横穴

本墳は当群中最も高所に築成された横穴である。採土工事中ブルドーザーにより玄室・羨道の上半分を消失している。

前庭は第７号横穴前庭築成の際に西側を切断され、全体的には本墳より第13号横穴前庭を宅地造成によって切断されて定かでない。

羨道部は閉塞石も他の横穴に比して大型の河原石３段を架設したもので、範囲は羨道全体を占めている。羨道床面は8°の傾斜を示すほかは崩壊甚しく定かでない。

玄室は隅丸長方形の平面で床傾斜5°前後を示している。本墳で特に問題となったのは床面基盤に東から西に低く傾斜する軟砂岩層が存在したことであるが、埋葬床面として定まった面が確認できなかった。

副葬品は東壁直下の硬質砂岩面を床面とした場合 2 cm 前後浮いた状態となり、軟砂岩を除去した面からの場合は西壁寄りの副葬品は 15 cm 前後上層に遺存したことになる。

副葬品は奥壁直下に須恵器坏身１、玄門寄りに同坏身１、玄室西壁直下に同蓋坏２セット・土師器坏１、玄室中央部に切先を西壁に向けた長さ 25 cm の刀子１・鉄鏃２、奥壁寄りに 10 cm の刀子１・鉄鏃１がそれぞれ検出された。本墳においても玄室内に５個の河原石が奥壁寄りに存した。

第９号横穴

第８号横穴の東側に隣接し、前庭部は第８号横穴の前庭が被うような状態を示し、本墳が築成上先行するものと認められる。前庭はゆるやかに羨門よりさがるが、1 m ほどで宅地造成のため切断されている。前庭西寄りの 1 m×80 cm 区域に放置された状態で遺存していた角の多い小型の河原石は追葬時の除石かと考えられる。遺物の混入はない。

羨道部は閉塞に大型の河原石を巾 1.3 m・高さ 60 cm 内に台形状に架設している。羨道平面は羨門・玄門で広く、中央部がやゝ挾くなっている。横断面は玄室とともに第８号横穴と同じように上半分を消失して定かでないが、ドーム状を呈するかと思われる。

玄室は不整形の隅丸方形で、主軸に対し東側が 50 cm ほど巾広く、両袖とも整い、袖部床面において玄室と羨道の境が 5 cm の段で区分されている。

副葬品は玄室西袖部に須恵器坏身１・高坏１・平瓶１・小型広口坩１が出土し、高坏に広口坩を乗せ、そのまゝ横転した状態がみられる。また東壁直下に人骨の上に須恵器平瓶１・台付盌１が出土している。本墳においても東袖部に扁平な河原石２個が床面に接して遺存していた。

第10号横穴

本墳は西側の第9号横穴の前庭を切断して前庭を設けている。25°勾配の傾斜をもって羨門に続いているが、前庭前方 80 cm ほどで宅地のため切断している。

羨道と玄室は区別できず、羨門口で巾 45 cm・奥壁巾 79 cm の筒形の平面を呈するものである。閉塞は比較的築成当時の姿を残すもので、巾 90 cm・高さ 70 cm 間に6段に架設され、基盤石に 50 cm×30 cm ほどの大型河原石3個を用いている。床面は東壁側が奥壁より 1.4 m、西壁側が奥壁より 1 m の所から排水溝が設けられ羨門口まで続いている。床面全体は主軸線に高く、両壁に近ずくにしたがって低くなっているが、全体では45°の傾斜で羨門へとさがっている。

副葬品は閉塞石内側西壁寄りに不明鉄器1、奥壁より 75 cm 東壁寄りで切先を西壁に向けた15 cm の刀子1が検出された。

第11号横穴

本墳は第12号横穴・第13号横穴とともに一つのグループを形成していて、Bグループよりは1.5 m ほど下位に築成されている。3基共有と思われる前庭は閉塞石直前まで切断されて、前庭部における前後関係は定かでない。

羨道部の閉塞の状態は良好で巾 90 cm・高さ 85 cm 間に基盤石に比較的大型の河原石を配し、7枚の架設よりなっている。床面は玄室より3°の傾斜で羨門に達している。横断面は崩壊のため定かでないが、アーチ状を呈すると思われる。

玄室は縦巾 1.86 m・横巾 1.95 m の方形であって、奥壁部で最大横巾となる。奥壁寄りに高さ 8 cm・巾 1.25 m の棺座を配している。横断面は整形痕を残すアーチ状を呈している。特に奥壁はゆるやかな弯曲で天井へと接しているが奥壁と天井との境は明確である。

副葬品は玄室東壁寄りの棺座上に切先を西壁に向けた 13 cm の刀子1、東袖部から須恵器坏蓋1セットが検出し、閉塞石内側床面より 40 cm 上で直径 38 cm・高さ 35 cm の大型甕が検出されたが、埋葬時のものであるか追葬時のものであるかは甕の型式変化が定かでないため床面出土と坏蓋との比較対照はできない。

第12号横穴

本墳は第11号横穴と隣接し、両者の壁厚は 20 cm 前後であって崩壊のため全体をみることはできないが、壁の一部は連らなっていたかもしれないほど接近している。

前庭部はまったく消失し閉塞石直前で断崖状を呈している。羨道は閉塞石が良好に遺存して巾 70 cm・高さ 75 cm 間に7段の架設がみられ、羨道内に崩れ落ちた4個を除けばほとんど原型と思われる。壁は西壁が袖を有さず、玄室奥壁に接しているが、前述した第11号横穴玄室東壁を考慮して掘削されたためであろう。東壁側は 35 cm の袖を有して玄室へと続くが、この附近が玄室と羨道を区別している。

玄室は片袖方形の平面を呈しているが、型式的片袖とは趣きを異にするものである。天井部は落盤によって不明であるが、両壁よりうける感じはアーチ状を呈するものと推定されよう。床面は奥壁より1 m のところ、それより 75 cm 下方の二段棺座が設けられ、上段棺座は巾 1.6 m・

高さ6cm、下段棺座は巾 1.87m・高さ3cm を計測できる。東壁直下から奥壁直下を巡り、西壁直下を通り羨道西壁直下を羨門まで続く巾7cm・深さ5cm の排水溝が巡ってある。

副葬品は奥壁部中央において鉄鏃残欠8本が検出された。また上段棺座に1体分、下段棺座に人骨片が検出されたが、下段における骨片が追葬遺体であるか、上段遺体の同一個体のものであるかは定かでない。

第13号横穴

第12号横穴の東側に隣接する本墳も両者の壁間は 10cm 前後しかなく、3基の横穴が制約された範囲内に掘削された感が強くみられる。前庭は消失し、閉塞より内部が遺存する。

閉塞は河原石2段が架設され、羨道は玄門に行くに従って広くなり、玄門部巾 1.12m を計る。玄室は主軸に対し横長の方形をなし、主軸 1.1m に対し横巾 1.7m である。袖部は東袖 7cm に対し西袖 35cm の比較差がある。玄室床面は全体が棺座的要素を呈し、玄門部で羨道と 7cm の段を有している。排水溝は巾 5cm・深さ 5cm で全体の壁直下に設けている。横断面はドーム状を呈しているが、全体では天井落盤で定かでない。

副葬品は閉塞石内側の西壁寄りに刀子片2、玄室中央西壁寄りに不明鉄器残欠1が検出された。人骨は西袖内側に集中された形で検出されている。このことは追葬を意味するものであろうかと考えられる。

第14号横穴

Dグループの第14号横穴から第16号横穴はグAループからCグループが丘陵南斜面を利用されているのに対し、Dグループは丘陵東斜面を利用して掘削されている。このため羨門口は第16号横穴の外は東向きとなる。

共有する前庭は丘陵斜面を巾 4.7m 切りくずし、第14号横穴・第15号横穴が 4.7mの前庭を二分していることである。第16号横穴は前庭北壁に羨門口を南に向け掘削されている。

第14号横穴前庭は13°の傾斜をもって羨門に接していて、段はない。羨門南側 95cm の所に前庭壁境があり、壁境はそのまゝ東へのび丘陵斜面に接している。この前庭壁に接した床面に 10cm 前後の河原石がほゞ平坦に発見されたが、閉塞用材であるかは確証されない。

羨道は第1号横穴につぎ長く 2.65m ある。Cグループ第12号・第13号横穴をある程度考慮しての掘削と考えられる。それは第14号横穴がCグループの後出とは言えずむしろ第13号横穴の玄室平面形が横長なことは、逆に第14号横穴によって制約されたと考えられる。

閉塞石は巾 85cm・高さ 55cm 間に5段乃至6段が架設され、閉塞外側には前庭検出の河原石と同規格の河原石が散在し、内側にも閉塞と同規格の河原石が多数検出された。羨道平面は羨門巾 50cm・玄門巾 96cm と玄門に行くに従って広がりを有している。

玄室は正方形に近い平面を呈し、袖は西袖 40cm・東壁 55cm がほゞ直角に整っている。床面は5°の傾斜をもって羨門までさがっている。棺座は奥壁寄りに縦巾 1.25m・横巾 2.1m、床面より高さ 10cm の規模で設けている。この棺座と壁面の境に巾8cm・深7cm 前後の排水溝

が巡ぐるが、玄室前方・羨道には続いていない。玄室横断はアーチ状を呈し、奥壁もアーチ状のゆるやかな弧を描いて天井に接している。縦断は台形を呈するものである。壁面はいずれも7〜8cmの工具で天井部より床面に向って整形されている。

副葬品は玄門寄りに須恵器壺1が検出された。

第15号横穴

本墳は第14号横穴の北側に位置し、主軸方位もほとんど同じである。

前庭は羨門より 60cm 南側に床面の傾斜を同じくした一条の溝が設けられている。しいて言えば、この溝が第14号横穴との共有前庭を二分する役目をなしているとも言える。溝の遺存する位置に第14号横穴にもみられたと同じ河原石があったが、閉塞石の除石とする確証はない。前庭は8°の傾斜をもって羨門へ続くが、前庭境は4cm の有段で羨道床面に続くことになる。閉塞石は巾1m・高さ 60cm 間に基盤石に大型の河原石を用いた5段の架設である。羨道平面は羨門附近が狭まく、奥へ進むにつれ広がりを有し、玄門部で最大巾となる。横断面は角丸長方形を呈している。

玄室は主軸に対し横長の角丸長方形を呈し、玄室全体が棺座的要素を整え、縦巾 85cm・横巾1.7m・高さ5cm を計測できる。棺座と壁面の境を巡ぐる巾 6cm・深さ3cm の排水溝が存するが、羨道へは続かない。床面は5°の傾斜をもって羨門まで達している。

本墳の埋蔵施設として前述の棺座上の奥壁北寄りに 20cm 前後に扁平な河原石15個を長さ1.15m・巾 35cm 間に配石した施設がある。長さ・巾の点からも充分棺座としての機能を有する施設であって、配石間より鉄釘1・刀子残欠1の検出をみたところからも棺座に違いないと思われる。

副境品は刀子残欠1・鉄釘1のみである。

第16号横穴

本墳はDグループ前庭北側境壁に掘削された小規模なもので、全長1.22m・巾 32cm 前後の筒形の横穴である。

前庭は第15号横穴前庭を利用し、羨門は前庭床面より 25cm 高位置にある。羨門前面は閉塞石の崩れ石が多く、閉塞石は巾 40cm・高さ 25cm 間に小型河原石を3段架設している。

玄室と羨道との区別がなく、羨門で巾広く、奥壁で最小巾となる砲弾状の平面形を呈するものである。天井部においても羨門で最も高く、奥壁で最も低くなる。床面はほとんど平坦である。本村横穴B群においても全長 1.2m の小規模な横穴墳が存在したが、当然埋葬される被葬者にも限界がある。

副葬品は皆無であった。

以上各横穴墳について概要をのべたが、これを一覧表に示すと表1のとおりである。

C 出土遺物

B項において若干は触れてあるが、未整理分もあわせてその概数を図示すると表2のとおりで

ある。

D 考　　察

Ⅰ　築成・構造について

まず築成される地形・地質についてであるが、遠江における横穴墳の築成は簡単に言えば、鮮新初期層の砂泥層の露頭する丘陵斜面を利用して掘削されるのが特長と言えば言える。更にその鮮新層を細分すると、特に掛川地方では掛川層群と称せられる中に6層が含まれていて、曽我・本郷・垂木・袋井市管ケ谷・春岡に存する横穴墳は、そのうちの結緑寺層と南郷層に分布する。本横穴墳は後者の南郷層に掘削されたもので、前々項で若干触れたが、層自体が軟砂層とで形成される互層で、しかも東より西へ約15°程度の傾斜を有した層であるため、そこに掘削された横穴は周壁・天井・床面ともに剝離が目立ち、保存状態は良好ではなかった。(註1)

構造においては、前庭部の築成は各グループ単位において共有する前庭を造り、各々は横穴墳を掘削の際に僅かに手を加えている。このことはA・B単位群において顕著である。

閉塞施設については、特色はないが、強いて言えば基盤石に大型の河原石を使用したものが多く、これを基礎に推定すると、閉塞の原型は縦断面が長方形または台形を呈するものであり、三角形を呈す閉塞は崩れたためであると思われる。また原位置と思われる閉塞石をみると、羨道内に石をつめ込むより、むしろ主軸に対しこぐち積みがなされたものとみる感が強い。

羨道部は本横穴墳群が築成を開始した初期の段階においては（第4号横穴・第6号横穴・第8号横穴・第9号横穴・第11号横穴)、法量の上からも比較的整った型を呈しているが、隣接する横穴に掘削巾を制約された横穴（第1号横穴・第14号横穴）にみられる如く、玄室の主軸より長く羨門から望む奥壁中心部が主軸より極端に片寄ったものがある。後者は隣接横穴壁を避けるための手段にほかならないし、C単位群においては壁間隅が10 cm～20 cm であるのは、築成当初の前庭境壁との関係があるためである。

玄室構造は棺座を施設するものと、施設しないものとに別けられ、その差異は不確認ではあるが、本横穴群では排水溝施設と関係があると考えられる。排水溝を施設する横穴床面の傾斜度が5°～6°に対し、棺座を施設する横穴床面は3°～5°までとなる。2・3の横穴墳において玄室床面にほとんど密着した状態の扁平河原石は棺座としての機能をもったものかと考えられるが、配石状態からは満足な結果が得られなかった。

羨道・玄室を通してみた場合に掘削過程において各々が良く整形されたものに古い時期のものが多く、粗雑なものに新らしさが認められる。

III.　年代について

遠江に横穴墳が伝播した時期は横穴式石室が受け入れられ、ほとんど遠江全体に普遍化した時期に伝播したと考えられる。このことは掛川市において調査の機会を得た宇洞ケ谷横穴墳(註2)で確証を得ることができた。それによると、須恵器は第Ⅲ型式前半のものであり、実年代は6世

紀中葉をやゝ遡ぼる時期を与えることができる。また築成終末期は須恵器第Ⅳ型式後半頃で須恵器第Ⅴ型式以降を副葬する横穴は築成せず追葬形態をとっているように推察される。

さて、本横穴墳の構造形態から年代を考察することは、構造上の型式序列が遠江においては未だ難しい段階であるため、年代序列の上で満足のできる須恵器をとおして考察すると、本横穴墳の発生は須恵器第Ⅲ型式後半からで（第４号横穴・第６号横穴・第８号横穴・第９号横穴・第11号横穴)、次に第Ⅳ型式前半として第１号横穴・第２号横穴・第３号横穴・第７号横穴・第14号横穴が成立したものと推定される。

追葬においては、第４号横穴には第Ⅴ型式前半期に、第６号横穴には第Ⅳ型式前半期にそれぞれ行われた確証を得た。

本横穴の築成順位については、前庭部の切り合いから判然としないが、ある程度把握できる。

Ⅲ　群構成と築成序列について

本横穴群においては明らかに４単位群に分けることが可能であって、それぞれの単位群が共有の前庭部を設けている実事は否定できない。Ｄ単位群（註３）を除いた他の３単位群にはいずれも第Ⅲ型式後半に成立した横穴墳が存在することは、社会形態・家族構成と密接な関係があろうと推定される。特にＡ単位群の基数・追葬数そして第６号横穴にみられた副葬品は郷構成の長的被葬者を想像するものである。

築成序列は想定の域を脱しないが、次のとおりである。

Ａ単位群　４号→６号→３号→２号→１号（５号？）

Ｂ単位群　９号→８号→10号

Ｃ単位群　11号→12号→13号

Ｄ単位群　15号⇆14号→16号

註

註１　「日本地方地質誌」中部地方　槇山次郎著　昭和33年

註２　昭和39年に掛川市屎尿処理場用地内で発見された横穴墳

註３　Ｄ単位群については、構造上第15号横穴が先行すると推定されるが、副葬品が検出されなかった。

表 1　岡津横穴墳B支群一覧表

	1 号	2 号	3 号	4 号	5 号	6 号	7 号	8 号
グループ	Ag	Ag	Ag	Ag	Ag	Ag	単独	Bg
高低	0	+42	+72	+75	+79	+81	+120	+194
主軸方向	N48W	N27W	N40W	N24W	N20W	N31W	N19W	N5W
全長	558	380	214	475	182	545	496	(400)
玄室長	177	196	170	271	172	297	260	250
玄室巾	110	98	●	122	69	115	100	—
玄室高	(95)	—	●	—	—	139	●	—
羨道長	381	184	●	204	110	248	236	(150)
羨道巾	85	86	62	98	45	102	64	—
羨道高	(110)	—	●	—	—	(126)	—	—
最大巾	195	216	61	227	90	245	156	185
最大高	—	—	95	—	82	172	124	—
奥壁巾	150	136	29	213	81	232	156	146
奥壁高	(143)	75	66	(148)	72	(146)	(110)	—
床傾斜角度	5°	6°	6°	1.5°	5°	5°	4.5°	6°
棺座	○	×	×	×	×	○	○	×
排水施設	×	×	×	×	×	○	○	×
追葬	○?	×	×	○	×	○	×	×
平面形	角丸方形	丸形	筒形	角丸長方形	角丸方形	角丸方形	筒形	角丸長方形

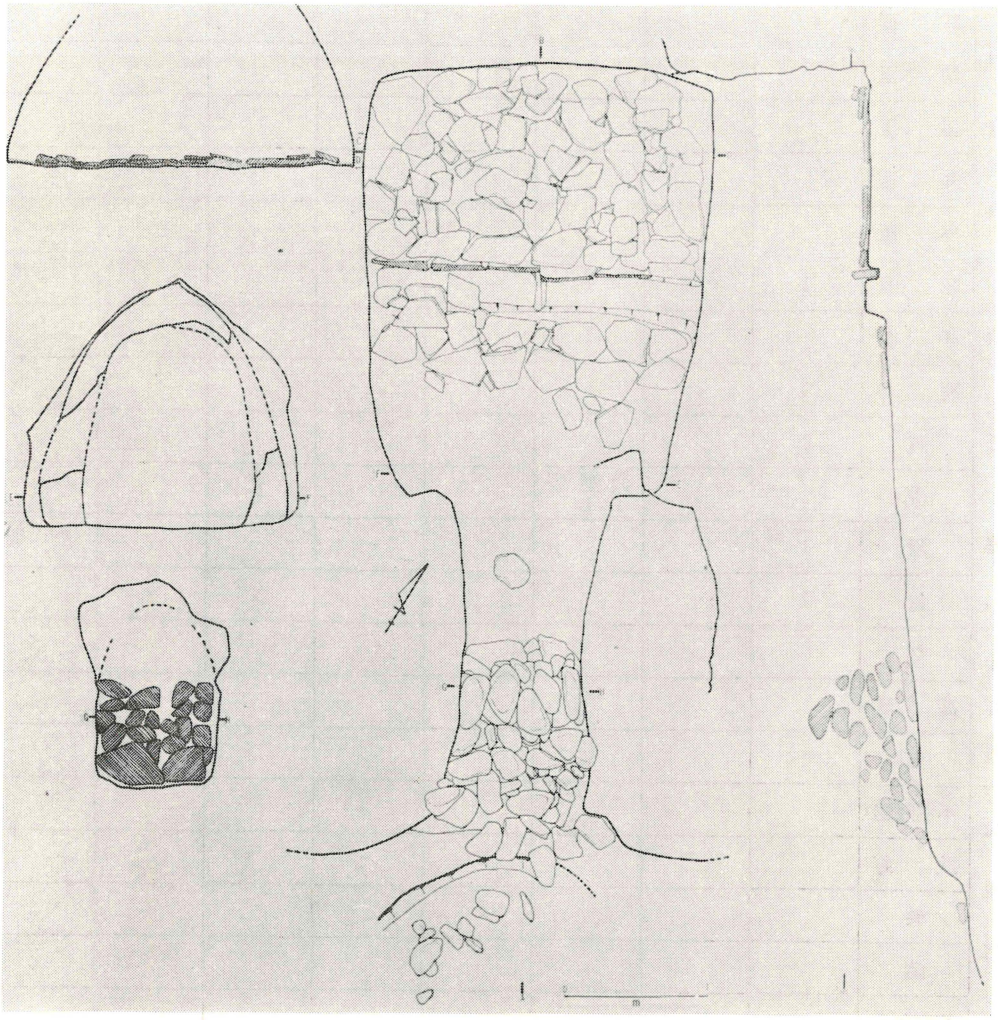
( ) 推定値，— 計測不能，● 機能有さず，○ 有，× 無　単位 cm

	9 号	10 号	11 号	12 号	13 号	14 号	15 号	16 号
グループ	Bg	Bg	Cg	Cg	Cg	Dg	Dg	Dg
高底	+182	+145	−9	−22	−58	−22	−22	−20
主軸方向	N12W	N5E	N15W	N15E	N10W	N84W	N83W	N15W
全長	370	354	345	(365)	(247)	493	303	122
玄室長	211	225	186	210	123	228	97	●
玄室巾	87	—	91	126	113	96	78	●
玄室高	—	—	—	—	—	115	100	●
羨道長	159	●	159	(155)	(124)	265	206	●
羨道巾	76	51	76	—	—	51	53	32
羨道高	—	●	—	—	—	(105)	85	42
最大巾	223	84	195	187	170	225	181	35
最大高	—	—	135	—	146	175	100	45
奥壁巾	208	79	190	160	165	205	170	●
奥壁高	—	90	135	—	112	160	84	●
床傾斜角度	3.5°	4.5°	38°	3°	4°	3°	4°	○
棺座	×	×	○	○ 2段	○	○	○	×
排水施設	×	○	×	○	○	○	○	×
追葬	○	×	×	○	○	○?	○?	×
平面形	角丸方形	筒形	方形	方形	長方形	方形	角丸長方形	筒形

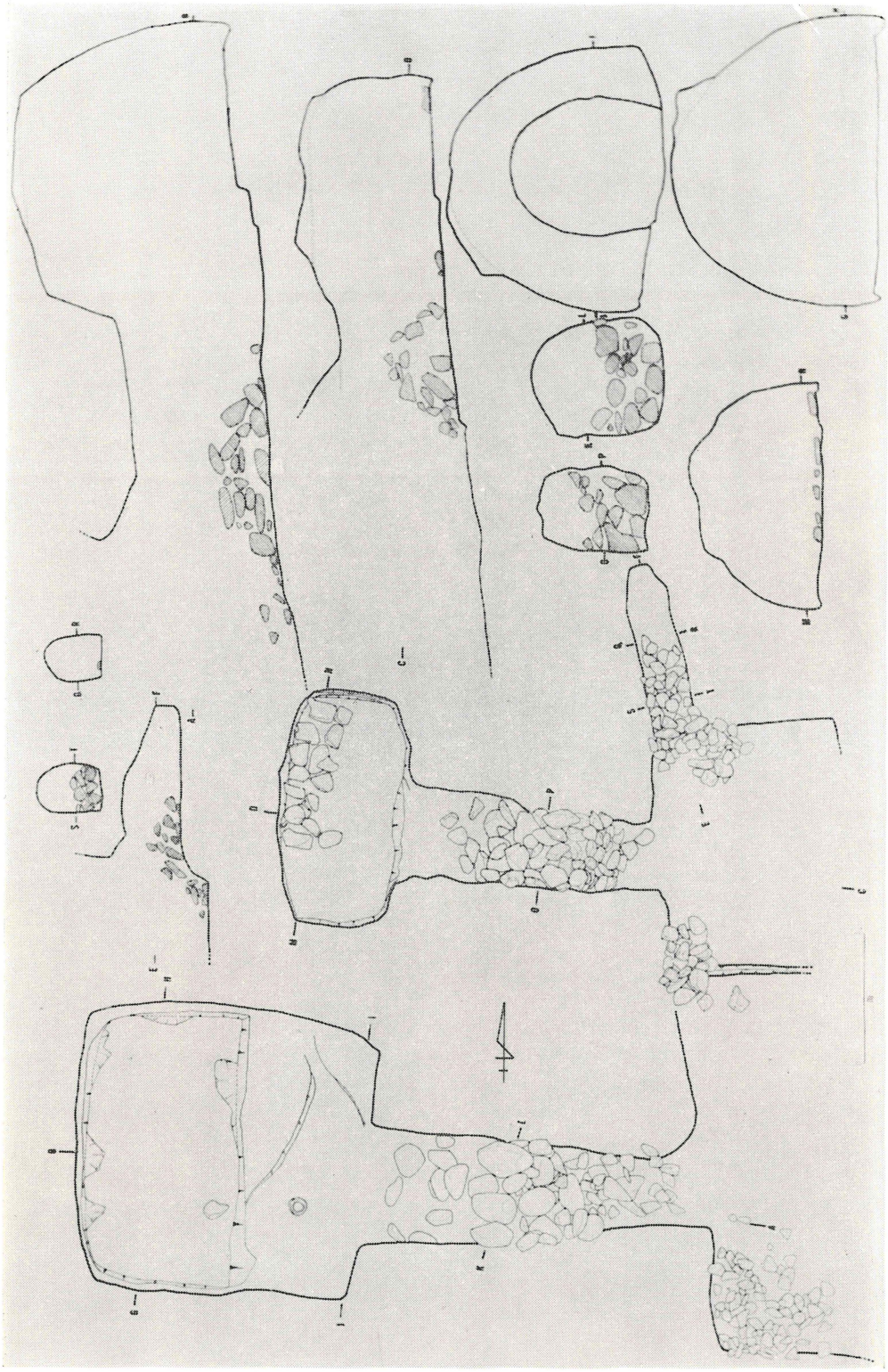
表 2　岡津横穴墳B支群出土遺物一覧表

品名		1号	2号	3号	4号	5号	6号	7号	8号
武具	直刀	1括			1括		1括		
	刀子	1			6	1			2
	鉄鏃	1			1				1
装身具	耳環	1			1		1		
	勾玉	1			1				
	切子玉	1							
	丸玉	4							
	小玉								
須恵器	坏身		1	2	1括		3		4
	坏蓋			1	1括		1		2
	高坏				1括	1	3		
	瓶	1			1		2	1	
	壺								
	坩			1			2		
	盈								
土師器	坏				1括				1
	高坏				1括				
	盌				1括		1括		
金属器	不明鉄器						1括		
	鉄釘				7				
	鈴						2		
	鍔						1		
その他	前庭から							瓶1	
	人骨	○					○		

品名		9 号	10 号	11 号	12 号	13 号	14 号	15 号	16 号
武具	直刀								
	刀子		1	1		1		1	
	鉄鏃				3				
装身具	耳環								
	勾玉								
	切子玉								
	丸玉								
	小玉								
須恵器	坏身	1		1					
	坏蓋			1					
	高坏	1							
	瓶	2							
	壺			大型甕 1			1		
	坩	1							
	盌	1							
土師器	坏								
	高坏								
	壺								
金属器	不明鉄器								
	鉄釘								
	鈴								
	鍔								
その他	前庭から		瓶1						
	人骨	○	○		○	○			



B群6号穴平面図及断面図
第1図



B群14号・15号・16号穴平面図及断面図
第2図

図版 1　岡津横穴墳B群の調査　その 1

A B　群　全　景

B　第 1 号～第 3 号全景

図版 2　岡津横穴墳B群の調査　その 2

A　第　1　号　内　部

B　第　2　号　内　部

図版 3　岡津横穴墳B群の調査　その 3

A　第 3 号遺物出土状態

B　第 4 号遺物出土状態

図版 4　岡津横穴墳B群の調査　その 4

A　第 4 号～第 6 号全景

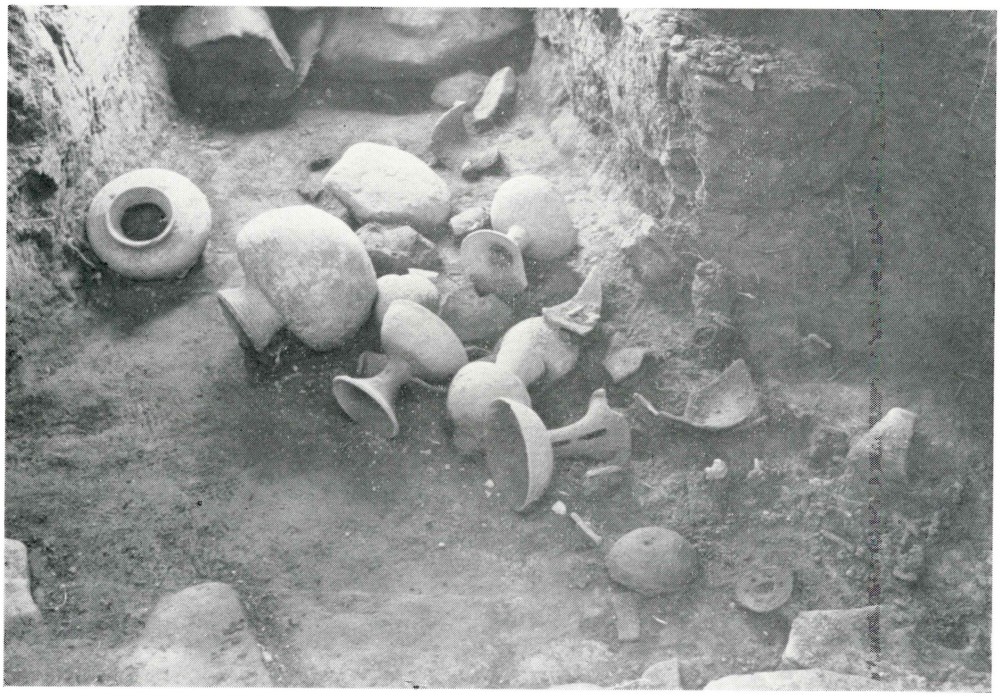
B　第 5 号遺物出土状態

図版 5　岡津横穴墳B群の調査　その 5

A　第　6　号　全　景

B　第　6　号　敷　石

図版 6　岡津横穴墳B群の調査　その 6

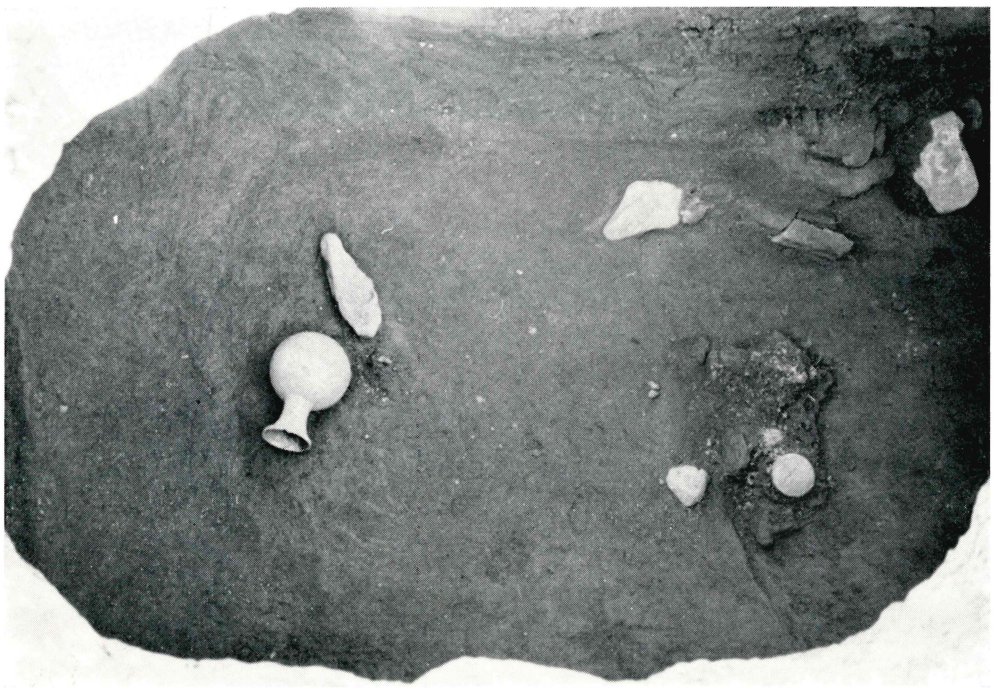


A　第 6 号遺物出土状態　その 1

B　第 6 号遺物出土状態　その 2（細部）

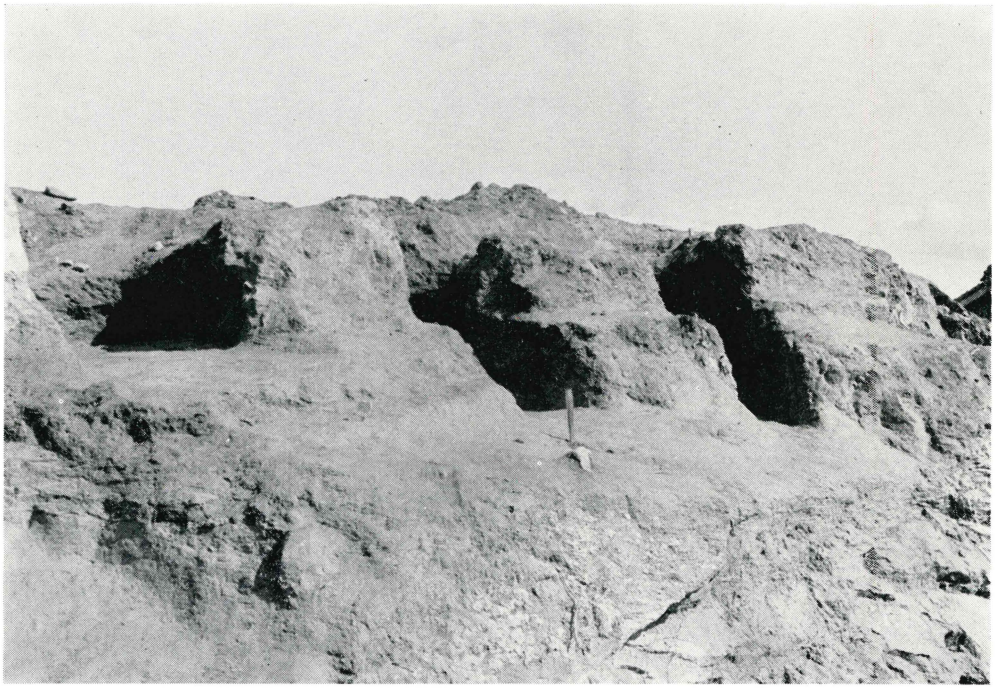
図版 7　岡津横穴墳B群の調査　その 7

A　第　7　号　全　景



B　第 7 号遺物出土状態

図版 8　岡津横穴墳B群の調査　その 8



A　第 8 号～第 9 号全景

B　第 8 号遺物出土状態

図版 9　岡津横穴墳B群の調査　その 9

A　第 9 号閉塞状態

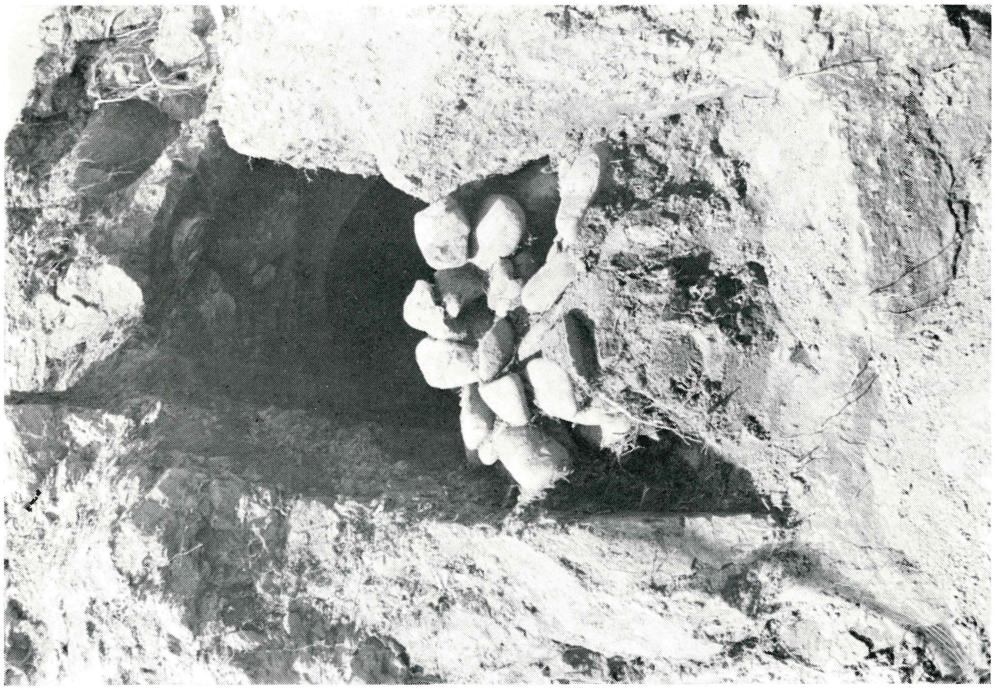
B　第 9 号遺物出土状態

図版 10　岡津横穴墳B群の調査　その 10

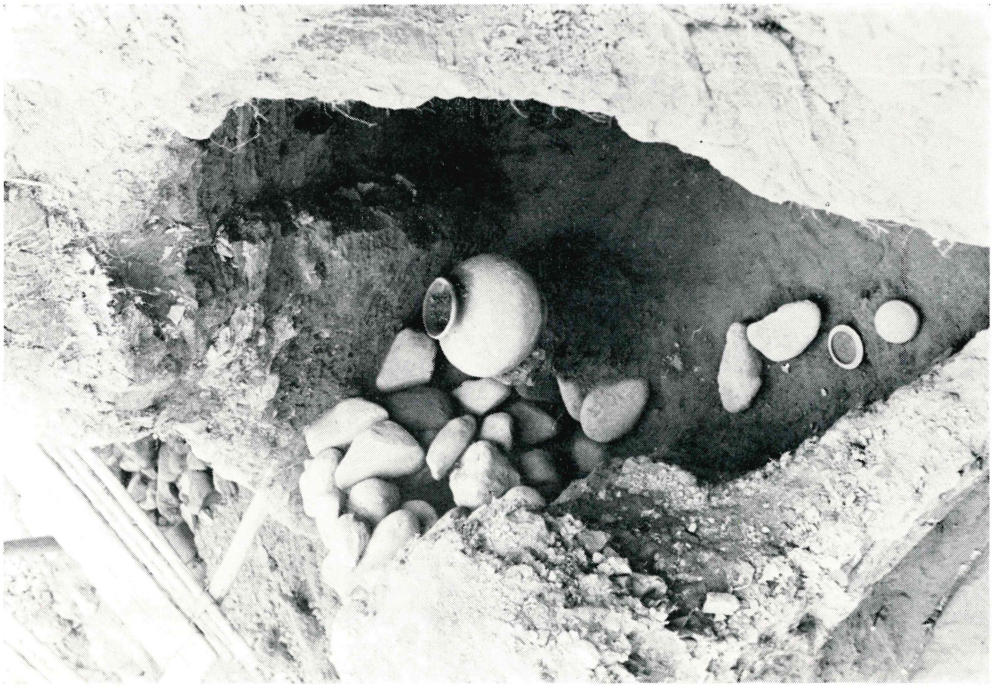
A　第 9 号遺物出土状態

B　第 10 号閉塞状態

図版 11　岡津横穴墳B群の調査　その 11



A　第 11 号 閉 塞 状 態



B　第11号遺物出土状態

図版 12　岡津横穴墳B群の調査　その 12

A　第　12　号　内　部

B　第12号遺物出土状態

図版 13　岡津横穴墳B群の調査　その 13

A　第 12 号 内 部（奥）

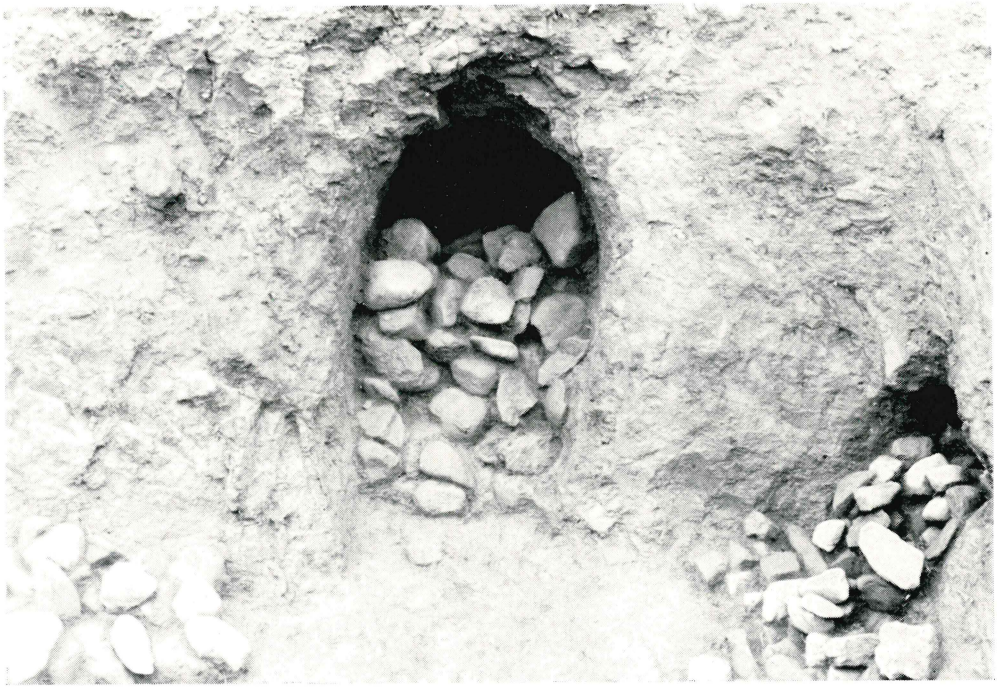
B　第 13 号 内 部（奥）

図版 14　岡津横穴墳B群の調査　その 14

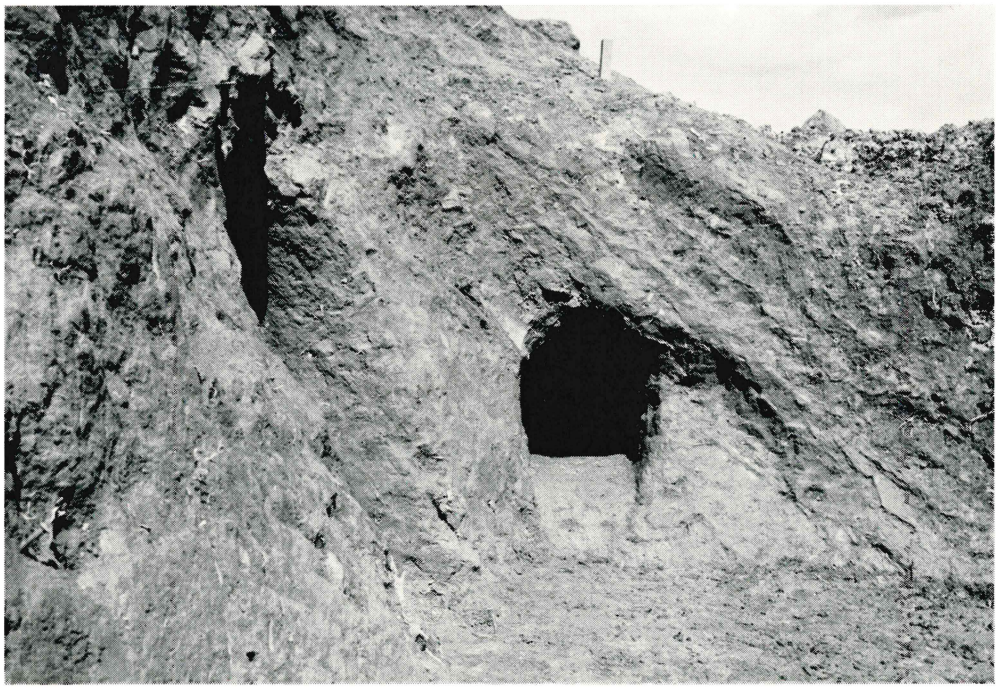
A　第14号遺物出土状態

B　第　15　号　敷　石

図版 15　岡津横穴墳B群の調査　その 15



A　第15号・第16号閉塞状態



B　第　16　号　全　景